

## ミニチュア・ダックスフンドの大腸炎症性ポリープ

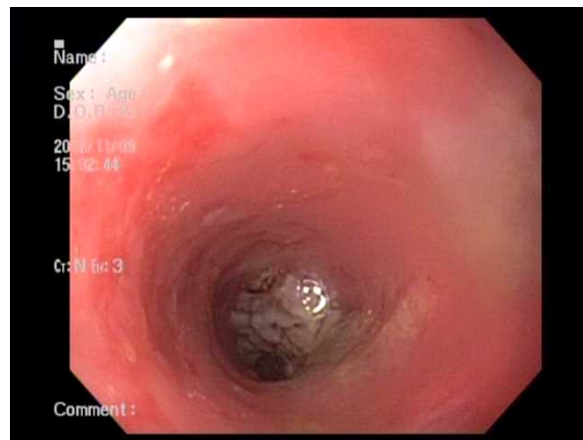
ミニチュア・ダックスフンドにみられる大腸炎症性ポリープは、発症機序をはじめ治療法に関しても解明されていない点が多い疾患である。ただし、免疫疾患の発生が多い犬種のため、消化管での免疫メカニズム異常がこの病変の発生に関与している可能性が考えられている。

この疾患は、ミニチュア・ダックスフンドの飼育頭数が多い日本での報告がほとんどであり、欧米からの情報入手は期待できない。国内での症例の蓄積により、治療法および予防法が早く確立されるのを期待したい。

[症状] 下痢、血便、粘液便、しぶりなど、大腸炎の症状を示す。一般的には、元気食欲消失など全身症状が出るのは稀である。通常の大腸炎治療への反応は乏しい。

### [診断]

- ・レントゲン：大腸の造影レントゲン検査
- ・内視鏡：大腸内視鏡検査による観察とポリープの細胞を採取しての病理検査を行う。造影レントゲン検査よりより確実な診断法である。



大腸内視鏡検査により観察された炎症性ポリープ

### [治療]

- ・内科：前述したように通常の大腸炎の治療への反応は乏しい。ピロキシカムの有効性の報告がある。

(犬の膀胱移行上皮癌および口腔の扁平上皮癌に関して、COX-2 阻害薬の有効性が報告されている。また、犬の大腸腺癌においても COX-2 発現が認められており、有効性が期待されている。人医領域においては、大腸腺癌に限らず大腸ポリープの再発防止にも使用していることから、COX-2 阻害薬であるピロキシカム (0.3mg/kg, SID) をミニチュア・ダックスフンドの大腸炎症性

ポリープに使用し、奏功した。)

- ・ 外科：直腸粘膜プルスルー術は、現時点で一番確実な治療法である。

IDEXX 社の情報では、炎症性ポリープに形成された腫瘍病変で下方浸潤性を呈したものは認められていないとされているが、診断がついたら出来るだけ早期に直腸粘膜プルスルーを行うべきである。



直腸粘膜プルスルー術

(肛門から直腸の粘膜面だけを引き抜き、病変部を切断する術式)